

和歌山大学教育学部 尾上 利美

昨年度に引き続き附属小学校の英語教育の充実のために、共同研究代表者と共同研究者のこれまでの経験と専門性を活かしつつ、授業実践の研究を行った。今年度は、関西空港での子供たちのコミュニケーション活動に本学部の学生も同行するなど、学生の経験や学びにも寄与することができた。

和歌山大学教育学部附属小学校 中岡 正年

1. 研究の目的と仮説の検証方法

本実践の子どもたちは4年生であり、社会科の学習にて、高野山には多くの外国人観光客がきていることを知った。そこで、昨年度の連携事業でも行ったように、実際に訪日外国人にウェルカムカードを渡す実践を行った。(図1)。その際、緊張してしまったり、上手く自分の考えや思いを伝えられなかったりしたことで、悔しい思いをしている子どももいた。しかし、その実践から多くの子どもが英語を話したい、外国の方とコミュニケーションをとりたいという思いが高まったと感じられた。

そこで、単元の終末に、既習事項や自分の思いを訪日外国人の方に伝える場を設定し、学習者がそのことを意識しつつ、外国語での表現をインプットする場面を設けた。そうすることで、コミュニケーションに必要な言葉を既習事項から考え、新しい表現を積極的に習得し、主体的に学習に取り組むと考えた。その仮説を検証するために、単元を構想し実践中とその後において、子どもたちの活動観察や聞き取り調査などを行った。

2. 単元計画

単元の終末場面には外国語を活用する意義や必要性を子どもたちが感じられるように関西国際空港にて自分たちの学習した内容をもとに和歌山の魅力を伝える場を設けた。これは、コミュニケーションをとる相手と場が明確であればあるほど、学習者がより英語を話したいという意識をもつと期待したためである。そこで、社会科や総合的な学



図1 高野山にてウェルカムカードを渡す場面

単元計画（全7時間）

- | | |
|-----|---|
| 第1時 | 外国語で自分のお気に入りの場所の伝え方を考え、表現を知る。 |
| 第2時 | 主教材を活用し、学校の中で好きな場所を伝える表現を知ったり、FLTに相談したりする。 |
| 第3時 | 和歌山の中での自分のお気に入りの場所を考え、外国語で伝える表現について知る。 |
| 第4時 | 主教材を活用し、和歌山の好きな場所を伝える表現を知ったり、FLTに相談したりする。 |
| 第5時 | 実際にインタビューをする場面を想定して、友達とお気に入りの場所についての3ヒントクイズを行う。 |
| 第6時 | 外国の方に、自分のお気に入りの場所を伝える表現を知ったり、FLTに相談したりする。 |
| 第7時 | 外国の方に、自分のお気に入りの場所を伝える。 |

図2 単元計画

習と関連させて学習を行い、第7時に関西国際空港にて和歌山の自分のお気に入りの場所を外国の方に伝える実践を行った。(図2)

子どもたちは、手作りのパンフレットも活用しグループでインタビュー活動を行った。限られた時間と場所の中であったが、どのグループも複数の外国の方に話しかけ自分のお気に入りの場所を伝えることができた。(図3)



図3 関西国際空港にてインタビュー活動を行う場面

3. 成果と課題

授業後の感想やアンケート調査によって、本実践を通して、子どもたちの多くは、本実践に肯定的な意見をもっていることがわかった。(図4)

本実践を通して、外国語を使う必然性がある活動とコミュニケーションをとる必然性がある活動を連携させること、また他教科や他領域との関連を行い伝えたい内容を明確にすることで子どもたちが積極的に英語を活用したいと考えることに効果的に作用するという見解が得られたと考えている。

今後も、コミュニケーションをとる対象者を明確にし、実際の場をイメージできるような単元の設定や教具の工夫を行い研究と仮説を検証するために実践を継続したいと考えている。

一方で、毎回そのような単元の設定は困難であることも考えられるので、子どもたちが将来、外国語表現を使うことが必然的なことであると考えられるような場面の設定を行う実践も構想していきたいと考えている。

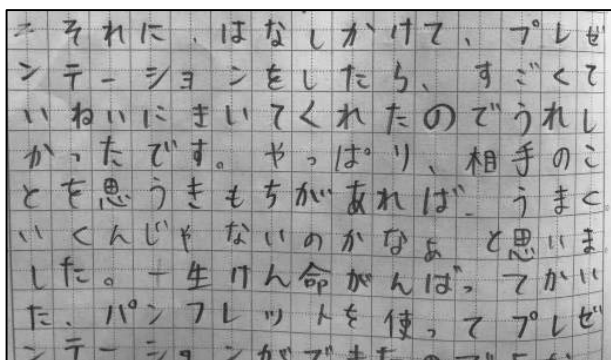
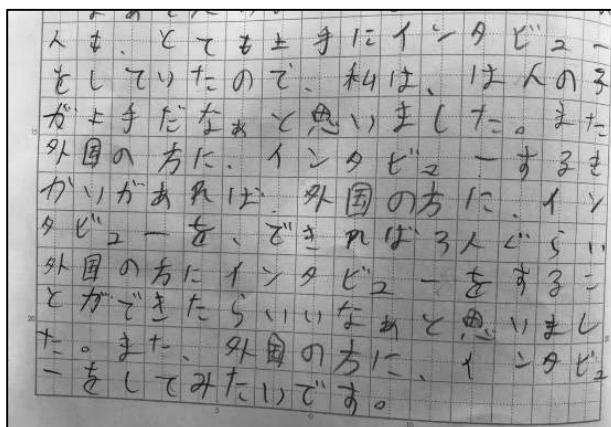


図4 子どもたちの感想より

つながる・広がる外国語活動

～「他教科・領域とのカリキュラムマネジメントを通して」～

中村 正雄

1. 目的

今年度、本校の研究テーマは『未来に生きて働く資質・能力の育成 ～探究力を育むカリキュラムデザイン』である。3年生という学年では、語彙力がそもそも少なく、母語ではない言語を使って主体的に活動するのは難しいと感じた。授業時間数も限られている中で外国語を話すということ自体、子どもにとって難易度が高いものであると感じたからである。しかし、3年生にとって魅力的な学習計画を立てることで、語彙力を補完しつつも意欲的に学習に取り組むことができるのではないかと考えた。それには、外国語活動の時間だけでなく、子どもたちがより多くの言葉に触れられるよう他教科・領域との関連が非常に重要であると感じた。特に総合的な学習の時間(以下 CHANGE)と外国語活動の2本の柱で単元を構成することで、学習したことを双方向に活用・発揮しながら進められると考え研究した。

2 カリキュラム・デザイン

総合的な学習の時間(CHANGE)CHANGEの学習において話し合うことで子どもたちはもっと外国語を知りたいという気持ちになった。外国語活動だけでなく、CHANGEの学習や国語科のインタビューの仕方と街区集が相互に結びつき、深められるよう計画を立てた。

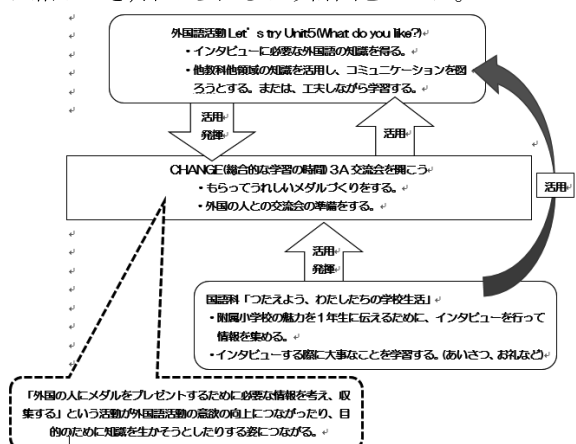


図1 カリキュラムデザインのイメージ図

- ①CHANGE 「3A 交流会の計画を立てよう」
- ②外国語活動「What ○○ do you like?の表現を知ろう」
- ③CHANGE 「メダルのイメージを考え、知りたい表現をまとめよう」
- ④外国語活動「知りたい表現をFLTの先生に質問しよう」
- ⑤CHANGE 「インタビューシートを作ろう」

⑥外国語活動「インタビューの練習をしよう」

3. CHANGE と外国語活動

本単元では、CHANGE と外国語活動を入れ子にして単元を構成した。子どもたちは相手の好きなものを聞き出すために既習の「What do you like?」を使おうとしていたので、より便利な表現「What ○○ do you like?」に慣れ親しませた。(②の学習)間にスポーツや色などを入れることで好きなもの・ことを聞き出すことができると子どもたちは知ることができた。

次の③の授業では、メダルのイメージ図を描かせ、「What○○ do you like?」の○○部分に入れる言葉(何を外国の人に聞きたいか)について話し合った。メダルという物から色や形を工夫したい、相手に聞きたいという意見は出ると考えた。しかし、それ以外の多事柄には気付きにくいと考えた。「こんなことをメダルもあるんだ」「こんなことを聞いてみたい」といった思考につなげるため、イメージ図をもとに紹介する活動をした。

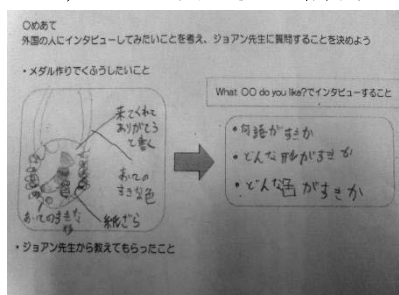


図2 メダルのイメージ図と聞いてみたいこと

先生 : どんなことを外国の人に尋ねてみたいのかな。
はると : 好きな季節をきいてみたい。
このみ : そうやね。今秋だからね。
りょう : そうそう、秋が好きってわかれば焼き芋とかメダルに入れたら喜んでくれるかも。

話し合いの中で、教師が想定していたものよりも多く、子どもたちが外国の人に尋ねてみたい事柄が出た。例えば『教科・果物・スポーツ・模様・マーク・動物・食べ物・季節・言語』などがある。イメージ図を共有することで知りたい外国語の言葉をまとめることができた。

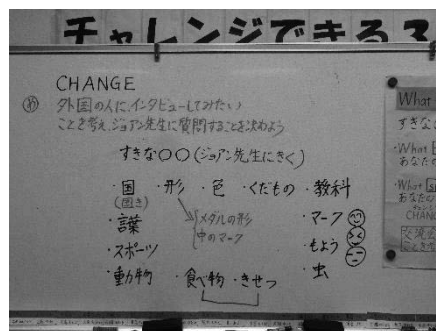


図3 子どもたちが外国語を使って聞いてみたい言葉

4. 子どもたちの探究的な学び

CHANGE の学習と外国語活動を組み合わせることによって新たに知りたい言葉が生まれ、FLT の先生に聞くことができた。そして、インタビューの練習を友だち同士で行った。(⑥の学習)

インタビューの練習では、3人グループを作り、1人が評価者となってインタビューの工夫やアドバイスについて話し合った。評価者を入れたのはペアでのインタビューの様子を客観的に見て、良かったところやアドバイスを考えさせるためである。子どもたちからは「Hello って挨拶がいるよ」「インタビューが終わったらお礼を言わないとね」といった意見が出た。さらに1回では聞き取れなかったときに「One more, please」と外国語を使った子や「See you と Thank you ってどっちを先に行った方がいいかな」と考えていた。話し合い活動の中で子どもたちは、外国の人とのインタビューを想定し何が必要なのか考える場面があった。



図4 インタビュー練習の様子

5. 授業の考察

本単元は、『外国の人が貰って嬉しいメダル作りをする』という学習課題を設定し、CHANGE の学習と外国語活動を相互に関連させながら学習を進めた。目標として①外国語を使って尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しみ、進んで外国語を使って友だちや外国の人とやりとりしようとする態度(主体的に取り組む態度)②外国語をもっと知りたい、使いたいと思ったり、外国語で何というのかという問いを持とうしたりする力(主体的に取り組む態度を支える省察性)は概ね達成できたと考える。

特に CHANGE と関連させることにより外国語の言葉をもっと知りたいと思う意欲につながることができた。例を挙げると、外国の人に尋ねる言葉の中に言語(What language do you like?)を選んだ子がいた。理由を聞いてみると、ゲストの好きな言語を知ることによってその言葉を使って「ありがとう」の言葉をメダルに入れたいということが分かった。

また、「メダルに模様を入れたいけど、外国語で何と言うのか分からない。」「FLT の先生に聞いてみたい。」などと知りたい言葉を CHANGE で考え、外国語活動で知ることによって学習の幅が広がった。また、外国語をみんなで共有することでクラス全員の語彙も増えていった。本単元では、教科書にも載っていない単語として(season, insect, language, design, pattern, mark, subj

ect, country)といった語句を共有し、フラッシュカードを用いて練習することができた。

さらにインタビューを想定してペアのやり取りを第3者の視点から評価し合うことで、よりよいインタビューの仕方について話し合ったことも外国語での新たな表現に触れる機会となった。それは、国語科の学習で「インタビューの仕方」を事前に学習したことが生かされたと考える。国語科では、「自分の学校の魅力を1年生に伝えよう」というテーマで学習を進めていた。魅力を伝えるには、学校にどんな魅力があるのか知らなければならぬ。そこでインタビューという方法で先生や6年生、卒業生などにインタビューを行った。子どもたちはどのようにインタビューを行えばよいのか話し合った。するとあいさつ・目的・許可・質問・お礼といったことが必要だと考えた。

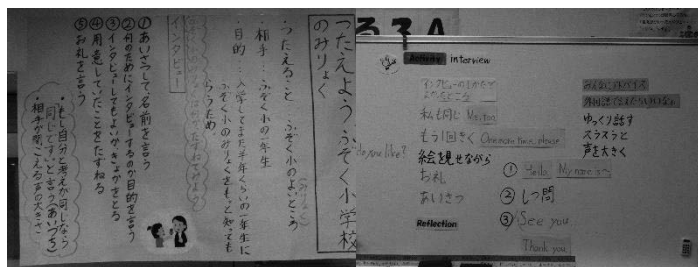


図5 国語科の学習(掲示)左と外国語でのインタビューにおける子どもの思考(板書)右

外国語活動のインタビュー活動の時にはいきなり質問するのではなく、あいさつをしたり、自分の名前を言ったりする子どもの姿が見られた。そして、子どもたちは外国語でインタビューする時の手順を話し

し合い、次のように考えた。①Hello②My name is～③What○○ do you like?④Thank you. ⑤See you

さらに自分も同じ考えだった時に「Me, too」や聞き取れなかったらもう一度言ってほしい「One more time, please」など国語科で学んだ手順やうなずきなど、相手意識を持って考えた発言が見られた。後で聞いた話ではあるが、プレゼントすることは秘密にしておきたかったので「なんのためにインタビューするのか」という目的に関する言葉は言いたくないと分かった。

次の外国語活動の時間では、ゲストを迎えて一緒に活動し、途中でインタビュー活動を行った。練習したことを上手く使ってインタビューしていたが、中には「What ○○ do you like?」の○○の部分をつまみ替えて、想定していたことよりもさらに聞く場面もあった。



図7 交流会でのインタビューの様子

6. 成果と課題

本単元を通して、子どもたちが、相手が喜ぶメダルをプレゼントするといった他者意識を持って取り組み、新しい表現にも挑戦しようとする姿勢が見られたことは非常に良かった。これは、外国語活動の時間だけでは実現しなかったように思う。3A 交流会を自らの手でデザインし、自分にとってどんな外国語の表現が必要なのか考え、既習事項と組み合わせることにより主体的に取り組む態度につながったのではないかと考える。もう一つは、ゴールを先に明確化することで子どもたちの学びを促すことができた。また、知りたい外国語を学びの足跡として掲示したり、フラッシュカードとして練習したりすることでクラス全員が新しい語句を学ぶ機会につながったことは非常に良かった。

そして、何よりも子どもたちが外国語を調べ、練習し、オリジナルメダルをプレゼントしたことについてゲストが大いに喜んでくれた。だからこそ子どもたちには満足感があつたように感じる。

「また、交流会をしたい」「もっと色々な人と外国語で話したい」と振り返りにも外国語に対する意欲の高さを感じることができた。

課題としては、発達の段階に応じて教師がどこまで支援するのが難しい所である。3年生という学年を考えると難しい単語が出た時に支援する必要がある。何よりインプットを繰り返し行わなければ、外国語活動が難しい、苦手だと感じてしまうことがある。また、図6にあるインタビュー時における許可に部分に着目させることができなかった。インタビューしても良いですか「May I ask a question?」などと言入れることで相手のことを考えながらインタビューすることができることにつながった。しかし、インタビュー時における評価者の視点をインタビューのしかたでよかったところ、みんなにアドバイスとしたので、教師とのねらいのズレが起こってしまった。子どもたちから声の大きさや速さなどのアドバイスが出たが、外国語の表現について考えて欲しかった。子どもたちに向けての発問などもっと視点を絞って考えさせることが3年生には必要であると感じた。

本実践を経て外国語活動における探究的な学びは、他教科や領域と関連させながら行うことにより、「もっと知りたい」「話したい」と外国語を積極的に学ぼうとする意欲につながると感じた。そのために教師が発達障家に応じた学習計画を立てる必要がある。そして、子どもの考えもみとりながら外国語活動の学習に生かして進めていくことがこれからの主体的な学びを支える外国語活動・外国語科の学習につながるのではないかなと思う。

参考文献

樋口忠彦・高橋一幸・加賀田哲也・泉 恵美子(2017)「Q & A 小学英語指導法事典」教育出版社
文部科学省(2018)「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編」文部科学省
兼重昇・佐々木淳一(2018)「Let's t r y ! 指導案・評価完全ガイド」学陽書房



図8
メダルをプレゼントする様子